

NEWS LETTER

Vol.1

イベント開催報告

7月30日（木）に2026年度第1回FD教員セミナー「学生が選ぶベストティーチャーによる授業運営の工夫 vol.6」をオンラインにて開催しました。本セミナーは2021年度より毎年好評をいただいている「学生が選ぶベストティーチャー賞」受賞教員による講演の第6弾です。今回は理工学部の山本晃輔准教授、文学部の波戸岡景太教授に、それぞれの専門や学生、授業の特性に応じた授業運営の工夫についてご講演いただきました。質疑応答も含め大変有意義な機会となりました。

< 申込者数：106名 参加者数：66名 >

学生が選ぶベストティーチャーによる授業運営の工夫

◆山本晃輔（理工学部准教授）

「理工系学生に届く授業デザインを考える」

- ・専門は応用認知心理学。前職の文系学部から本学理工学部に着任し3年目。
- ・担当授業の特性：受講者は理工学部・生命科学部の学生150名程度。
- ・授業中の反応を観察し、コミュニケーションを大切に授業を改善。
- ・理工系学生の傾向：文章より図表や具体的な数値を好む、授業のルールや評価基準が明確だと安心する、話を聞くより問題を解くことを好む、結論を先に知りたい、等の特性を分析し改善に活かした。
- ・学生が「考え、体験し、対話する」時間を意図的に確保し、文章中心の資料から、図や表、写真を多用したわかりやすいものに変えた。
- ・毎回のリアクションペーパーには必ず目を通し、翌週の冒頭に質問回答や意見共有を行うことで双方向性を確保し、学生との対話の入り口とした。
- ・わかりやすさを追求する一方で、学問の奥深さを損なわないか、学生の心にフックとして残る授業とは何かを問い続けている。

◆波戸岡景太（文学部教授）

「俯瞰と没入のあいだを探して」

- ・専門はアメリカ文学・文化のアダプテーション研究。
- ・担当授業の特性：クラス指定された水曜1限の2年次演習で20-25名程度。
- ・モチベーションの維持が難しい環境で、逆にモチベーションを上げることを目標に、「むずかしい」から「わかる」に変わる授業ではなく、「わかる」から「おもしろい」に変わる授業展開を検討した。
- ・物語の本質を体感してもらえよう、授業内で「ジェンガ」を使用しゲームのスリルや他者との駆け引きから「物語の秘密」への理解に繋がった。
- ・学生自身に物語のあらすじを考えさせることで作家と同じ視点に立たせた後、ノーベル賞作家の作品や映画化作品等へと導き、自分たちの体験が既に研究の一部であると俯瞰させた。
- ・ノーベル賞作家の小説をおもしろいと感じられることを目指し、逆算して要点を分解し、14回一続きのドラマのように授業を組み立てた。

参加者アンケートより

- ◆ 先生方がどのような授業を実施していて、よりよい授業をするためにどのような取り組みをしているか、それを知ることができて大変勉強になりました。改めて、授業を行うこと、授業を作ることは楽しいなと思えた素晴らしいセミナーでした。どうもありがとうございました。
- ◆ それぞれの具体的な工夫、背後にある「考え方」がとてもよく理解できて大いに参考になりました。
- ◆ おふたかたの先生から、いずれもフレッシュかつ工夫を凝らした授業運営について、具体的な授業の組み立てや学生への配慮について語っていただけて、大変参考になりました。山本晃輔先生のお話では、公の場では自己表出に慎重な今の学生にも振り方次第で発言してもらうことも可能なのだとわかりました。波戸岡景太先生のお話では、文字を通して理解・解釈するしかない文学についても組み立てによっては興味や好奇心を醸成することが可能なのだとわかりました。
- ◆ 今回も両先生のご説明から多くの示唆を得ることができました。同時に、両先生ともに（昨年のセミナーでのご指摘である）「学生から高評価の授業が本当によい授業なのか？」との点に触れられていたことも印象に残りました。学生にとってずっと気になる（考える）点、どこかにフックとなる内容を残すこと、容易には答えが出ない問い、本質を考える契機となる授業を行うことが重要とのメッセージとして伺っておりました。
- ◆ 発表してくださった先生方の「授業の設計」が綿密に練られていたことが共通点でしたが、そのプロセスは独自性があって勉強になりました。
- ◆ ご発表内のお話にもありましたが、学生さんが自分の生活と一続きになっていると実感できるような授業内容を私も模索していきたいです。貴重な会に参加させていただきありがとうございました。
- ◆ 異なるアプローチだけでなくご登壇された先生方の分野に関する情報等も随所に入り、大変興味深く拝聴いたしました。

